

武蔵野日曜聖書講筈 祈禱会

鳩の如く素直なれ

―マタイ伝第10章16～42節―

1975年4月27日

小池辰雄

バカに徹する 十字架を通ったキリストの霊 終末的希望 どしどし展開していくんだぞ ヤケソ信仰 どこへ行っても福音のはなし 神さまの店はキリスト、キリストの店は我々 「56」は「66」じゃ

【マタイ10】

16 視よ、我なんじらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るが如し。この故に蛇のごとく慧く、鳩のごとく素直なれ。17 人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、会堂にて鞭うたん。18 また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人とに証をなさん為なり。19 かれら汝らを付さば、如何に何を言わんと思ひ煩うな、言うべき事は、その時さずけらるべし。20 これ言うものは汝等にあらざ、其の中において言いたもう汝らの父の霊なり。21 兄弟は兄弟を、父は子を死に付し、子どもは親に逆いて之を死なしめん。22 又なんじら我が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐え忍ぶものは救わるべし。23 この町にて責めらるる時は、かの町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんじらイスラエルの町々を巡り尽くさぬうちに人の子は来るべし。

24 弟子はその師にまさらず、僕はその主にまさらず、25 弟子はその師のごとく、僕はその主の如くならば足れり。もし家主をベルゼブルと呼びたらんには、ましてその家の者をや。26 この故に、彼らを懼るな。蔽われたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬは無ければなり。27 暗黒にて我が告ぐることを光明にて言え。耳をあてて聴くことを屋の上にて宣べよ。28 身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。29 二羽の雀は一錢にて売るにあらずや、然るに、汝らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。30 汝らの頭の髪までも皆かぞえられる。31 この故におそるな、汝らは多くの雀よりも優るなり。32 されど凡そ人の前にて我を言ひあらわす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん。33 されど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父



の前にて否まん。

34 われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな。平和にあらず、反つて剣を投ぜん為に来れり。35 それ我が来れるは、人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑より分かつたん為なり。36 人の仇はその家の者なるべし。37 我よりも父または母を愛する者は、我に相応しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず。38 又おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相応しからず。39 生命を得る者はこれを失ひ、我がために生命を失う者はこれを得べし。

40 汝らを受くる者は、我を受くるなり。我をうくる者は、我を遣し給いし者を受くるなり。41 預言者たる名の故に預言者をうくる者は、預言者の報をうけ、義人たる名のゆえに義人をうくる者は、義人の報を受くべし。42 凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に冷かなる水一杯にても与うる者は、まことに汝らに告ぐ、必ずその報を失わざるべし』

● バカに徹する

マタイ伝10章16節、キリストが十二弟子を遣わしたところですね。

16 視よ、我なんじらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るるが如し。

我々信仰者は、神・キリストを牧者としますから、この「羊」であります。羊は主の命にこれ従つて動くもので、従順なものです。「狼」はサタンの手下。権謀術数を、企みをやり、暴力を使う。悪だくみと暴力の世界です。そこへ従順な無抵抗な羊を狼の中に入れたら、これは食われてしまう。

この故に蛇のごとく慧く、鳩のごとく素直なれ。

「鳩の如く素直」というのは、

「羊の如く素直」

といつてもいいわけです。蛇と鳩はちょうど、サタンとキリストとの——鳩は霊鳥ですから、「聖霊鳩の如く」という。蛇はアダム・イブを騙したサタンの手下ですから——「蛇のごとく慧く」と、「鳩のごとく素直なれ」というのを、そういった角度でもつてとるといふと、

「サタンの手下でありまた神の手下である」

ということになり、これは矛盾してしまふわけです。

「天国と地獄とを両方もて」

なんていうわけです。もちろん、それはキリストはそういう意味で言われたわけではない。ただ私がいま、「蛇」というのはそういうことだし、「鳩」というのはそういうことだというわけですけれども、この場合はもちろん、蛇はなかなか賢い。賢いことをただ「蛇の如く」といつたので、蛇の悪さの方はこの場合、意味をなさない。だから、



「賢明であつて、かつまた従順であれ」

ということ。賢明であるというのは、ただ犬死いぬじにするように狼の餌食になるなど。キリストも十字架につく時までには、いろいろな悪いやつを肩すかしさせて、適当にスツスツと姿をくらましておられた。あれがこの「蛇の如くきとく」というわけです。けれども、いよいよ時がきたらば、はつきりと自分を言い顕あらわして、そして十字架に向かつて行かれた。

ですから、皆さんもこの社会に出ると、狼的なやつがあります。「蛇の如くきとく」というけれども——まあキリストは相対的な意味で言われたのだと思うけれども——本当はバカに徹した方がいい。もちろん、賢明なことは大事なんです。賢明なことは大事なんですけれども、もうひとつ、そのバカに徹する方は「鳩の如く素直なれ」の方です。神さまに本当に自分を投げ出した従順である、細工のない生き方。それと、使命のあるかぎり、世の中のバカ野郎の——それこそ本当のバカの——餌食になるようなことがないように、そこは賢明にと。ま、こういう意味でしょうね。

● 十字架を通ったキリストの霊

17 人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、会堂にて鞭うたん。18 また汝等わが故によりて、司つかさたち王たちの前に曳ひかれん。

これはキリストがそういう運命になられるから、自分の弟子たちも同じようなことになるからというので、言われたわけです。

これは彼らと異邦人あかしとに証をなさん為なり。19 かれら汝らを付さば、如何に何を言わんと思ひ煩うな、言うべき事は、その時さずけらるべし。

これは本当にそうですね。私たちは御霊の世界に入っていると、その時その時にちゃんと言うべきことがひらめいてくる。これは御霊の権威です。御霊をいただいて、その権威がないと、かえって正直ダメになっちゃう。ですから、この私たちの信仰は毅然きぜんとしたところがないといかん。そうすると、

「あれはちよつと、普通の議論では、あの人にはたちうちできないな」ということに向こうが勤つとづくわけです。

20 これ言うものは汝等にあらず、其の中にありて言いたもう汝らの父の霊なり。

キリストの場合は、これを「父の霊」とおっしゃる。それはいいんですけども、十字架を通って聖霊がきたらば、これは「聖霊」である。

「其の中にありて言いたもうものは聖霊である」

ということ。「主の祈り」の中に、

「汝ら、かく祈れ、『天にまします我らの父よ』」

とある。それはキリストがその直弟子たちに言われるときには、「父の霊」なんですけれども、



やはり贖いを通って聖霊を与えるというのは、これはキリストの霊ですからね。キリストの贖いによらない直接の霊というのは——キリストは言えるけれども、また、キリストはその現実においてはそういうような角度から仰っているけれども——福音の角度からいうと、やはりキリストの方が前面に立つ。前面にキリストが立つてなくて、ただ「父」というと、それはちょっと把握の仕方が、あるところがちょっと抜けてしまいます。私は、もちろん「父」と言うときもあるし、キリストを「主」と言うときもある。まあ「主」の方が前面に立ちますけれども、前面の奥にはもちろんそれを通して「父」であります。そこがはつきりしていた方がいいと思います。

「其の中において言いたもうものは、わがキリストの霊、贖い主の霊なり」

ということ。中世の神秘家はいきなり神の中に没入するような角度があった。そして、キリストが薄くなって、「キリストに学びて」という。

「キリストに倣ならいて」

という言い方は、本当の意味では福音的でなくなる。

「イミタツイオ・クリステイ」「キリストに倣ならいて」

というのは、トマス・ア・ケンピスの結構な本なんだけれども、へたすると、十字架が抜けてしまう。

21 兄弟は兄弟を、父は子を死わたに付し、子どもは親に逆いて之を死なしめん。

大変なことだな。そういう大きな紛争がくるわけだ。

22 又なんじら我が名のために凡すべての人に憎まれん。

ま、「すべての人」よりかむしろクリスチャンに憎まれる。

されど終おわりまで耐え忍ぶものは救われるべし。

この「終まで耐え忍ぶものは救われるべし」というのは非常に力強い言葉ですね。まあいろんなことが起きますよね。味方と思つたら味方でなかったり、友だちと思つたら欺あざむかれたり、いろんなことがある。この

「終わりまで耐え忍ぶ」

というのは決して消極的なことではない。これはもちろんこの力を与えるものは御霊ですから。御霊があれば耐え忍ぶことができますけれども、「自分の信仰」なんていつてやっていったら、なかなかどうしてこれは耐え忍びきれない。たとえ耐え忍んだとしても、本当の勝利とはちよつと違つたようなことにならないともかぎらない。

「終わりまで耐え忍ぶ」ということが、私は御霊がきたら、こういう言葉がそんなに辛い言葉でなくなつてしまった。それは大丈夫できる、もういよいよ耐えていく、忍んでいく。どういふもんですかね、そういうなにか力りきみがなくて、これはありがたいですね。私は無教会にいたときは、こういう言葉が非常に信仰的英雄のように響くわけだ。ところが、もう御霊がきたら、これは忍ばざるをえないんです、終わりまで。もしできなかったら、そ



これは御霊がないというだけのはなし。それだけのことです。自分の信仰とか、人の判断とか、そういうことが問題でなくなってしまうたわけです。

●終末的希望

²³この町にて責めらるる時は、かの町に逃れよ。

キリストはいろいろな相対的状況を考えられて、

「責められるときには、かの町に逃れよ、無理はするな」

というわけです。キリストの言葉にしろ何にしろ、ひとつの言葉をとらえて、それをすべての場合にそれを当てはめようとしたら、かえって観念になってしまう。いわゆる「原理」になってしまう。福音の世界は原理ではない、あの「原理研究会」なんてあるが。その時の、最も実存的な一回かぎりの響きをもって受けとっていく。しかも、それが今度は、その呼吸がわかってくると、そういう言葉が今度はどういう場合に、また自分にひびいてくるかということがだんだん分かってくるわけです。それは論理ではない。

誠に汝らに告ぐ、なんじらイスラエルの町々を巡り^{めぐ}尽くさぬうちに人の子は

来る^{きた}べし。

これはちよつと当てがはずれた。神の国は非常に近いという。だけれども、キリストがこう言われたようにはならなかった。では、

「キリストの預言は当たらないじゃないか、ダメじゃないか」

と、こう思うわけです。使徒たちもそうです。だけれども、その時の現実でそれほどまで迫っていると思っていた。それは神さまの本願でもあり、またこちらからの悲願でもある。けれども、これは現実がその通りには来なかったって、その言葉が外れているわけではない。今でもそうなんです。今でも、明日、再臨のことがあるかもしれないし、何年先か、何千年先かわからない。けれども、

「人の子はもう今にも来る」

と。「今にも来る」という、これが終末的希望なんです。明日にも、今晚にも神の国を待っているというのが終末的希望で、

「何年先にどうだ」

なんて、そういう占いみたいな予言はかえって本当の意味で終末性をもっていない。いつも終末に直面しているんです。でありますので、一日を一生として歩くような生き方をして、

それでいつぶつたおれでも、アーメン・ハレルヤである。だから、そういう角度から、こういう言葉は質的に受けとらなくていけないので、

「来なかったからどうの、来たからどうの」



というようなことではない。

●どしどし展開していくんだぞ

²⁴弟子はその師にまさらず、僕はその主にまさらず、
 という、だんだん世の中はダメになってしまふ。弟子は、それはその師にまさらないです、正直ね。それは現在、弟子というものは先生にはかなわない。けれども、先生が地上を去つてから、その弟子が今度はまた先生の上を行くようなことにもちろんなりうるわけだ。

「現実において、先生と弟子の間はこういうわけだ」
 というのではないですか、

「弟子はその師にまさらず」

というの。「いつまでもまさらず」とは書いてない(笑)。

「僕はその主にまさらず」

と。だけれども、キリストは、

「お前たちは私よりも大きな仕事をする」

と言われたのは、弟子はその師にまさるわけです。あれはもちろん、

「お前たちを通して私が大きな業をする」

という、奥の意味はそうだと私は思いますけれども。実に現象として、

「どしどし展開していくんだぞ」

ということですから。また、その弟子にまさらないような先生だったら、これはダメなんだよな。たとえば、学校でも学生の方がどうも先生よりかできるなんていうんでは。部分的には先生をやりこめることもあるでしょうけれども。

²⁵弟子はその師のごとく、僕はその主の如くならば足れり。

「如くならば」だから、数学的イコールではない。

もし家主をベルゼブルと呼びたらんには、ましてその家の者をや。²⁶この故に、

彼らを懼るな。蔽われたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬは

無ければなり。²⁷暗黒にて我が告ぐることを光明にて言え。

密かに秘伝のように語ったことを公に伝道しろと。

耳をあてて聴くことを屋の上にて宣べよ。²⁸身を殺して靈魂をころし得ぬ者

どもを懼るな、

そういう殺人犯みたいなやつは別にこわいことはない。魂はそれでは死にはしないんだと。

身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。

本当におそれるべきものをおそれよということですね。神をおそれよと。

「悪人はおそれるな、神はおそれろ」

ということ。



●ヤケクソ信仰

29 二羽の雀は一銭にて売るにあらずや、然るに、汝らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。

一切の現象はみな神の許しのもとに、あるいは神の耐え忍びのもとに行われるという。こういう言葉も、世の中矛盾だらけですよ、

「一体こんな矛盾だらけな、悪いものがはびこっていて、善きものがいろんな苦しみを受けていて、一体神がいるのか」

という疑問をよくやるわけです。

「戦争で罪なき者が殺されて、それで権勢をほしのままにするやつが勝手なことになる」とは何事だ。そんなことまで神さまは耐え忍んでいるのか」

と、言いたくなるわけです。

私は今度の『無者キリスト』（著作集第1巻1975年10月刊）の中にも、どこかの序文に書いておいた。

「神さまはデタラメな神さまだ。この一見デタラメに見える神さまを本当に信じぬくことが本当の信仰だ。計算が合ったり、ソロバンが合ったり、考えでもって辻褄が合ったり、もしそんな神さまだったら、それで神らしいなんて思ったら、とんでもない。そんなのはかえって神さまらしくない」

と、逆説的なことを私は書いた。それは、もうひとつ別な角度でいうと、ヤケクソ信仰というんです。ヤケクソでもって信じなくてはいかん。しかし、ヤケクソでもって放ったらかしてしまったら、それはダメなんだ。ということは、どうということかというのと、

「矛盾だらけの不合理だらけのどんな現実でも、私の中にいる神の霊はそれに勝つ

あんまり」

ということなんです。

「どんなことにでも本当に勝つぞ。どんなに現象的に、結果的にマイナスのように、失敗のようにみえても、それでも勝っているぞ」

と。それはこれが本当の信仰の現実です。だから、本当の信仰というのは常に勝利している。「そのうちに勝つだろう」

ではない。希望は現実となつていくんです。常に勝利しているのが本当の信。負けても、行き詰まっても――それは人間の側のはなしで――それでも、その中に住み給うところの御霊の神は勝つておられる。これをつかまえていないとね。これをつかまえていけば、もう大丈夫です。私の聖霊は非常に凶太い聖霊ですから（笑）。本当ですよ、これ。やぶれかぶれで言っているのではないですよ。ええ、これは本当ですから。もう本当に敵がないです、正直。天下無敵、インヴェンシブル・アルマダ（無敵艦隊）という。だから、

「汝の敵を愛せよ」



というのは、わけがないんです、敵を愛することが、敵を救いあげるんだからね。敵がないんだから。何でも救ってしまう。善きも悪しきもないんです、本当は。相対的な

「善きも悪しきも」

なんてものは五十歩百歩なんだ。みんな悪いんだ。それを全部救ってしまう。

ま、こういう言葉は、高等学校や中学校の生徒には無理です。あなた方は聴く耳ある者だから聴いていらつしやると思いますが、それでも。

29 二羽の雀は一錢にて売るにあらずや、然るに、汝らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。

一切の現象の奥には——しかし、落ちることもありますよ、「許しなくば」だから——一番深く神さまの御意が、物理の法則よりも神の霊の法則がもつと素晴らしく動いている。ただし、その霊の法則は、我々の理解の面ではわからない。非常に矛盾しているようだし、不合理のようだし。

「それでもなお」

というのがこの霊の法則なんです。私なんかも、

「あんな善良な方がどうしてあんなに人生の、たくさんの苦しみにあわなければならぬか。そしてとうとう本当に不幸で終わってしまった」

「神さまは一体あれをどうしてくれるのか？」

と言いたくなるですよ。それでもなお、その人が天界で一番素晴らしいところに置かれているということを経験するを得ない。

●どこへ行っても福音のはなし

30 汝らの頭の髪までも皆かぞえらる。31 この故におそるな、汝らは多くの雀よりも優るなり。32 されど凡そ人の前にて我を言いあらわす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言い顕さん。33 されど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否まん。

これは、はっきり言うべきときには言わなくていかん。

とにかく正直、どういう所へ行っても、私はなにかこの福音のはなしをする。私みたいななこういう地位（学校長）にいますと、時々宴会に行かざるをえないでしょ。そうすると、料理屋の仲居さんなんかでできると、

「あなた、私をいくつに見えるとおもうかい？」

なんて言うのと、たいいてい10年くらい若くみるよ、私のことを。

「そうじゃないよ」

「それは、どういう健康法ですか？」



なんて聞いてくる。あれこれ冗談言ってから、それから福音のはなしになっていく(笑)。それで福音の話をしちゃってね。やつぱりああいう人たちは、しかし、魂は純真ですよ。じつとして聞く。それだから私はそこで、ある意味において伝道しちゃうわけです。昨日の女の子もひよつとしたら来るかもしれないよ。

学校の生徒は、男の子はある程度興味をもって聞くけれども、さあその先、
「飛び込んでこい」

といったって、なかなか来ない。今度は京都へ行ったら、「わがキリスト」という話は公の公演会(1975年5月4日京都公会館にて)だから、大いにやるつもりです。ああいうように大きく網を打つことも大事なんです。そうすると、

「いや、どうもこれはちがうな」

といった、聞きにくるのが出てくるわけです。奥田君の集会に行ってもらいたいです。

私は陸軍にいたときも、キリスト者であることをはつきり言っていました。あの頃は私は無教会でね、無教会でもやはりはつきりしていた。宴会に行っても——今は宴会に行ったら飲んでしまっただけでも——あの頃はすぐお猪口をパツと伏せてしまっただけで飲まない。

「水をください」

と(笑)。完全に禁酒だったけれども、この頃は自由自在。普段飲まないものですから割合に、なんて、酔わないです。相手をしながら、

「飲む者には飲む者となり」

というわけで(笑)。それで何をしているかというところ、いい気になっているわけではない。何かそこで話を展開してしまう。PTAの人もこの次くらい、やって来るかもしれない。

●神さまの店はキリスト、キリストの店は我々

34 われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな。平和にあらず、反つて剣を投ぜん為に来れり。

ぶつそうなわけです。地に平安は投じてくださるんです。平安は私たちにくださる。シャローームの平安をくださるが、平和のシャローームはやらない。そんな安っぽいものではないというんだ、本当の平和は。まず引つかき回すという。「つるぎを投ぜん」と、これはもちろん真理の剣です。御霊の剣。剣なんていったってそんな武器ではない。

35 それ我が来れるは、人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑より分かたん為なり。

だからさ、一家が分離しちゃう。

36 人の仇はその家の者なるべし。

と書いてある。キリストも、ナザレでもって自分の親しい人には迎えられず、とうとうナ



ザレを出てしまった。イエス・キリストでも出てしまったんだから、まあいいよ、身内や親戚にクリスマスチャンがいなくなつた。みんな安心しなさい（笑）。まああの手島さんのころは感心ですがね、手島さんは強力だから。

37 我よりも父または母を愛する者は、我に相応しからず。

これは本当にそのとおり。父や母どころでない。妻も子も――マルチン・ルターが言ったとおり――恋人も、例外は一つもない。あまり聖書には恋人のことが出てこないね、けしからんと思っているんだけど（笑）。まあ雅歌書にはおおいに肯定して書いてあるけれども。キリストがサタンに試みられた時に、恋愛の面では試みられない。

我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず。

これはもういつも申し上げているとおり、

「相対的な一切の関係をまず断ち切れ。ただキリストと我という関係だけだ」

と。これに徹して、その十字架の贖いを本当に受け、御霊がきたらば、キリストの生命と愛と光がもう充満してくるから、そうしたら、今まで切った関係は逆にこつちから繋いでしまう。救いあげる繋ぎ方です。救いあげる繋ぎ方で、妥協する繋ぎ方ではない。

38 又おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相応しからず。

これはこの地上では、十字架を荷^{にな}わざるを得ないんです。十字架をもし荷っていないとするならば、それは本当に生きていない証拠なんだ。本当に生きる人は必ず十字架があります、どんな順境にしようとも。でありますので、キリストに従う者は必ず十字架を負わなければ従えない。しかも、それは負い得る。御霊の力で。ですから、福音書には

「御霊の力で」

と書いてないけれども、そういうことが奥にあるわけです。

「相対的な生命を得たつてダメだ」

ということ。

39 生命を得る者はこれを失い、我がために生命を失う者はこれを得べし。

我がため福音のために相対的な生命を失う者は、逆に今度は、「これを得べし」というのは、「もうひとつ奥の生命を得る」ということ。

40 汝らを受くる者は、我を受くるなり。我をうくる者は、我を遣し給いし者を受くるなり。

これはおもしろいでしょ。私たちを受ける者は、キリストを受ける者。キリストを受けらる者は神を受ける者。これはちゃんとその連なりがある。だから、一貫しているわけです。神さまの^{でみせ}出店はキリストで、キリストの出店は我々である。だから、同じ同質の世界にいるから。結局、

「我らを受くる者は神を受くるなり」

ということになってしまうわけです。



●「いのり」は「のりこむ」こと

41 預言者たる名の故に預言者をうくる者は、預言者の報むくいをうけ、義人たる名のゆえに義人をうくる者は、義人の報を受くべし。

そのとおりです。

42 凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に冷ひやかなる水一杯にても与うる者は、まことに汝らに告ぐ、必ずその報を失わざるべし』

なにもその報いを得んがためにやるのではない。自然にそういう結果になるというわけです。因果応報というものは、これは霊界の世界も、物理界もやはり因果応報なんです。必ず霊法の世界は、霊の法則の世界は、そうなっている。だから、

「小こき者に冷ひややかな水一杯やる者は即ち我にくれたものである」

と、別なところで言つてらつしやるとおりです。

私たちは、そういう意味で、キリストに連なつていけば、御霊で本当にキリストに連なつていけば——その「連なつていけば」ということは、祈りの世界によらなければ連なれないですよ——投げかけていかななくてはいかん。その祈りも、ただこうやって一緒に集まつて祈るのが祈りばかりではない。電車の中でもどこでも、目をつぶればすぐその世界。言葉の祈りも何もいらん。もう沈黙でいつこう差し支えない。

「いのり」というのは、キリストに「のりこむ」ことなんです。「い」の字はいらぬ。キリストの中にのりこんでしまつている。これはもう瞑想めいさう、即祈りいっきしですよ。

瞑想即祈り、そういうことであります。そうするともう、ここに書いてあることは何も説明する必要はないんです、実は。ずーつと読めてしまふ。だから、本当は祈禱会というのは、こうやってお互いに聖書を読みながら、あとは祈ればいくらいなものです。そういうことでね、まあ、聖書はやつぱりこうやってお互いに——説明でも何でもありませんが——読みましたら、もうこれだけでマタイ伝10章がずーつと腸はらわたの中に入つてきてしまつた。どうもありがとございました。

あのね、何も力まなくていいですよ、この祈りの世界はね。キリストの中に自分はずれこんでしまうことです。立場を失うことです。そして、今度は具体的な問題に対して祈つていけばいい。まずその中に入らなければダメですよ、キリストの中に入つて、それから具体的なことを祈ると、その祈りは私心のない祈りになる。そして、一番深い意味において聞かれてしまふ。

私は今日は始めに祈らないことにしましょう。Tさんからそつちへ、短くていい、何でもいいです、順にどうぞ……。

